

## 日本における中国女性史研究と私

—— 解放視点からジェンダー視点へ ——



前山 加奈子

駿河台大学における23年間に担当した科目は、総じて中国語の授業や演習、近現代中国の社会文化に関連したもの及びフェミニズムやジェンダー関連の講義であった。それは私自身の研究テーマが、近現代における中国女性の社会文化思想の領域にあったためだが、講義に研究内容を反映できたことは大学の教員として幸運であった。それは当然と言えば当然だが、カリキュラム上の必要講義科目に合わせて研究テーマ以外の準備をしなければならないことも往々にしてある。

そこでここでは、近40余年の日本における中国女性史研究と私自身の研究活動を振り返り、今後の研究への展望へと繋げていきたい。なお本稿は3月15日に経済学部「最終講義」に手を加えたものである。

中国女性に関連する専門研究は、中華民国期を除くと中国においても80年代までは、歴史上傑出した女性の生涯を取り上げ紹介するか、女性解放運動（史）関連かであった。私が1966年に学部卒論のテーマとして、「女性解放思想家」の秋瑾を選んだ時には、そのような背景があった。当時の日本の中国史の分野でも、中国女性史という研究分野は存在していなかったのである。しかも日本で知られている近現代中国女性は、赤十字社の李徳全、孫文夫人の宋慶齡、文学者の謝冰心、丁玲といったところであった。

秋瑾は日本留学中に光復会や孫文たちの同盟会に参加し、帰国後、実際に武力を以って清朝に抵抗し、いわば「死の美学」のもとに敢えて殺された。その一方で、暗闇（抑圧された境遇）の中にいながら、その暗闇にも気づかない女性たちを呼びさまそうとして、女子教育や女性雑誌創刊を主張・実行した。その意味で女性解放の先駆と言われる。

日本では、作家で中国文学研究会のメンバーの武田泰淳が『秋風秋雨人を

愁殺す—秋瑾女士伝』(筑摩書房)を昭和43年(1968年)に出して、女性革命家として、また当時としては数少ない、詩文にすぐれた女性として、主に新中国に関心をもつ人や中国文学愛好者の間で、知られるようになった。

1960年代の中国においては、49年以降の社会主義体制下では女性は完全に解放された存在と位置づけられたため、社会問題として総体的に女性が敢えて取り上げられることはなかった。社会主義国家においてはもはや女性差別は存在しない、という認識である。その中で秋瑾は一貫して英雄として近代史(革命史)のなかに位置づけられていた。私自身もその解放史観のなかで、秋瑾を捉え、彼女の書いた詩文も女性解放思想の表われとしたにすぎなかった。

修士論文のテーマは、梁啓超の「新民学説」と「女学(女子教育)」を関連させたものであったが、主任教授からは、梁を思想家ではなくジャーナリストだとして、論文に取り上げるほどの意義はないと言われた。現在では、思想(史)分野で梁は近代思想家の重要な一人として取り上げられ、女性史の領域に於いても、ジェンダー視点や国民国家論からも、多方面にわたって言及されている。

また当時「中国の女性解放」に対して、日本の男性研究者のなかには、「あんなに強い中国女性を解放する必要があるのか？」と揶揄的に言う人もいて、何を以って「強い」とするのか、見識を疑わざるをえなかった。個人的な自己主張の強さと社会や家庭における位置、政治や経済的な側面における自主的自立的な立場を全く認識できない、「ジェンダー」感覚が、当たり前として存在していた。「役に立たない勉強をするより嫁にいった方がいい」と言われた女子院生の一人として、納得できないものの効果的な反駁は何もできず屈折した思いだけが残った。これも時代の産物だったのだろうか。

ちなみに私が「ジェンダー」という言葉に初めて出会ったのは、I. イリイチの『ジェンダー』であった。当時はイリイチのこの注釈の多い講義録を理解するのに精一杯で、後にジェンダー概念が「補完する関係」から発展していくことを予想すらできなかった。

1977年近現代中国史研究者と4名で、中国女性史研究会を立ち上げたが、文化大革命直後で、学問研究の空白期が続いていた中国大陸からは学術的な

史資料はなく、75年に台湾の研究者が出した女権関連の史料集や、やはり台湾で復刻された30年代の女性生活史といったものを読むことしかできなかった。当時すでに中国研究所に主として新中国の女性を取り上げていた婦人問題研究会があったが、分野や文革評価の相違などによって、直接的な交流はなかった。

78年に小野和子氏が『中国女性史』（平凡社）を上梓し、近現代中国における女性関連の思想や事象を初めて系統的に取り上げ、国内外で注目、評価された。しかし私はこの書の中で貫かれている画一的な男女平等論に対しては疑問をいただき、書評にその旨を加えた（『歴史評論』359号）。中国研究者には、私もその例外とはいえないが、中国の「革命」や「解放」に対しては思い入れの強い人が多い。小野氏はその後の版で、最も問題の大きかった文化大革命時期を削除した。当時の中国研究者の中には、「男に出来ることは女にも出来る」「女は天の半分を支える」というスローガンを、そのまま無批判に取り入れがちであった。この時期の機械的な男女平等論に基づく女性労働に対して、後に金一虹氏が社会調査によって批判的な論文「“鉄の娘”再考—中国“文化大革命”時期のジェンダーと労働」を發表し、高い評価を得ている。

中国における近現代中国女性史の構築は、80年代の初めになってやっと着手された。中華全国婦女聯合会が女性運動に関連する史料を全国から収集し、まず時期区分した史料集を編纂した。そしてそれらの史料に基づいた『中国婦女運動史（新民主主義時期）』を編集・出版した（1989年）。歴史観は中国共産党史に沿った革命史・解放史観であるが、当時の日本における研究者には、そのまま受け入れられた。中国女性史研究会はこの運動史の編訳を決め、私も積極的に加わって95年に『中国女性運動史1919-49』（論創社）として出版した。

女性史研究は歴史思想分野では極めてマイナーの存在で、ほとんどの女性史研究者はアウト・サイダーに甘んじなければならなかった。そのため研究者を目指す人は敢えてこの領域を避けていく時期が長く続き、現在もその延長線上にあると言っても過言ではないだろう。このような状況の中で、半ば趣味人のように立ち上げた中国女性史研究会では、各自が関心のある時期や

テーマを研究し、報告していった。84年にはそのような研究活動の中から、注目すべき女性を取り上げ『中国女性解放の先駆者たち』（日中出版）を出版した。

85年から中国の女性研究者との交流、アメリカの中国史研究者との研究交流が始まり、一方で中国においては、婚姻家庭や一人っ子政策などが問題視され、国際シンポなども行われるようになった。また女性史を中国史の中に如何に位置づけるかが課題となっていくが、依然として模索状態が続いた。キリスト教、文学、留学生、政党、家族論などの多方面から切り込んでいく段階であった。

中国女性史研究会は1989年になって初めて研究機関誌を出すことになり、当時東大の院生だった秦玲子さんと二人で担当した。「創刊の辞」は、私が中国風に詩にしたが、わずか22ページの薄い同人誌のようなものだった。以後年刊にして、今年で第22号に至っている。

「創刊の辞にかえて」

滔々たる黄河の水 / 悠々たる長江の流れの中から / 女たちの詩が聞こ

える。 / 喜びの詩、哀しみの詩。

女たちの嘆きが聞こえる。 / 父のため、夫のため、子のため、 / ただひたすらに生きて、 / 大地に還っていった。

女たちの呻吟が聞こえる。 / 深い暗闇の底で、 / その暗さを知った女たち。

/ 一縷の望みもないままに、 / ただ一条の光を求めた女たち。

女たちの隊列が見える。 / 同胞への訴え、応える声。 / 憂いの叫び、衝き上げる怒りの、渦。 / 曙光を浴びて、いま立ち上がる。

滔々たる黄河の水 / 悠々たる長江の流れ / いまも変わらず。 / 悠久の歳月を隔て、 / 白浪たつ海を隔て、 / いま、彼女たちの軌跡を辿る。

先人の轍の跡は薄くとも、／ 踏み出した私達にあるのは、／ 大地を這う気概、／ 生命を産み育て慈しむところ、／ 限りない探究心、／ 朋友諸兄姉の励まし。

海を渡り、歳月を越え、／ 絆をさらに固くして／ 薄暗がり的一幕を／  
いま、新たなる思いで開ける。

中国の改革・開放政策の進行と共に、史資料の開示や閲覧が可能となり、図書館、資料館、档案馆の利用が可能となって、研究業績にもそれが顕著に反映されるようになった。そのため中国へ資料収集に行くことが論文執筆の大前提となったほどである。私も93年から三回にわたって科学研究費を受けて、一次史料の発掘やその後の研究文献の収集を続けてきた。

90年代には、北京での世界女性会議開催を機に、一時期女性関連の研究が重点的に進み、日本に於いてもそれに触発されて、中国社会に於ける女性が多く取り上げられた。また世界から注目された中国女性は、それまでの解放視点ではなく、ジェンダー視点の導入を期待（強制）され、「解放された」中国女性ではなく、ジェンダーで論じられることになった。それとともに中国女性史もジェンダー角度からの構築に移っていった。私の「近代中国女性と国家とのかかわり——ジェンダー的視点からの再検討の試み」（『「日本」国家と女』青弓社、2000年所収）は、ジェンダー視点から中国女性史を新たに組み立てようとしたが、さらに検討を加えなければならぬだろう。

思想分野での新しい史料を発掘・開拓していくうちに、女性対象の刊行物に行き着き、1994年に北京大学で行われたシンポで報告発表した（〈論《妇女园地》中对传统妇女观的批判——中国三十年代的女性主义（『妇女园地』における伝統的女性観への批判）〉《北京大学妇女问题第三届国际研讨会论文集》北京大学中外妇女问题研究中心）。当時は全く新しいテーマとして、注目された。以後、中国女性史の中で、刊行物や女性編集者が必ずといってよいほど社会文化思想を担う存在として組み込まれ、修論や博論で取り上げられている。

また中国女性史も革命史観や解放史観としてだけでなく、次第に多方面から構築されるようになった。現在では出産・生育という医療と歴史、社会学

などの学際領域で研究が進んでいたり、纏足を服飾・風俗文化から捉えたり、前近代に於いても族譜・家譜や法廷での判例などから女性の状況を論じ、解放史観から全く離れて女性の特徴を探る業績が出てきている。

私はそれらの中で、女性が男性主導のメディアの中でどのように独自の発言を広げていこうとしたのか、また日本の出版文化の中における女性論が、特に1910年代から「大正デモクラシー」といわれた時期に中国へどのように伝えられ、当時の女性観に反映されたか、新たな側面から捉えてきた（『女性改造』誌からみる日中両国の女性観（1922年～1924年）』『駿河台大学経済論集』第22巻第2号掲載など）。これらの論稿の中で、日本からは良妻賢母主義というマイナス・イメージの女性観が中国に伝わった、という既成概念に異なった視点を入れることを試みたが、今後は、日中両国の間での女性をめぐる社会文化思想の伝播・受容状況をさらに進めて考えていきたい。